も軍人らしい言葉で、『一切を佛陀に』といふ風であるといつて居たのである。けれども、其の眞實であるには服せざるを得ない。已に、カンボヂアの建築法自身斯の如くになつてゐる。之には、累層法といふ印度の圓天井法のみを用ひ、石材の層を皆平らに積んであるが、石層毎に、上に行くに從つて少しづゝ、下よりも突出して積み、終に圓頂で狹くなつて結合する樣に造り上げてある。斯ういふ圓天井は、持合ひでもたせるのでないから、壞れ易くない利益はあるが、之が步廊や塔となると、極めて僅かの場所より殘らない事になる。而して此の石造りの重い屋蓋の狹い廊下や小房は、唯諸神のみ甘んじ得る位のものである。人間は、日本の樣に木造家屋を造つてゐたのである。之は確かに耐久力は少いが、柱を高くし、桁間を廣くして、明るく廣々して風通しがある。不幸にして、王宮や、草屋となると、この樣な建物は悉く灰燼に歸して、已に古く跡を絕つたのである。斯くして、曠野の中に姿を止めてゐるのは、永遠の神殿のみと云ふ有樣である。

此の諸神は何であつたか。之にも保存された銘文で、少くとも古代には、印